

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

葬送儀礼を論じるにあたって、よく見受けられる一つの誤解に触れておきたい。それは儀礼の変遷の背後に、「野蛮」から「文明」に至る「進化」の過程を見出そうとする視点である。

日本列島に暮らす一般生活者を考えた場合、死者の扱い方は古代における遺棄、中世の納骨、近世の寺内墓地というように、一貫して丁寧な方向に向かっていているようにみえる。そうした事実を考慮すれば、葬儀と墓制の変化の背景に、葬送に関する文化の洗練と儀礼の蓄積をみたくなるのも確かに無理のないことである。しかし、それは正しい理解であろうか。

現代においても、墓を造らない民族や地域は数多く存在する。インドでは火葬した遺体を河に流し、死者を記憶に留めるための装置をいっさい設けないことが一般的である。墓を造らないインドは、家の墓を設けて供養に訪れる日本よりも、「野蛮」な段階に留まっているのだろうか。いうまでもないことであるが、こうした見方はまったく的外れである。死者の遺骨をガンジス河に撒く風習の背景には、それを支える死に関する独自の理念が存在するのである。

インド人にとってガンジス河は、天からヒマラヤ山脈に下った水脈がそのまま下流まで続いたものだった。河は天に連なる聖なる流れであり、そこに撒かれた遺骸の靈魂はその水脈を遡及して天の世界へと帰っていくのである。チベットの鳥葬でも、鳥と一体化した死者の魂は空高く舞い上がり、天界へと至ると信じられていた。

墓を残さないこれらの葬送儀礼の背後にあるものは、⁽¹⁾そうした風習を必然なものとする固有の死生観であり、それは「野蛮」や「文明」といった範疇とは完全に異質である。思えば日本列島においても、縄文人は共同体の構成員を村落の中心ないしは近辺に埋葬していた。一般庶民の葬送が風葬に近い形態をとっていた平安時代と比較すれば、縄文時代の方が遺体ははるかに丁寧な扱いを受けていた。だからといって、縄文時代の方が文化が進んでいたなどという人はいないであろう。

後にも触れるが、他界表象が発展し彼岸に関するより精密な見取り図が描かれるにつれて、人々の関心は魂の行き先の問題に集中し、この世に残された遺骸や骨がぞんざいに扱われる傾向さえ看取されるのである。

それでは、これまで見てきたような日本列島における骨や死体に対する態度の変化の背後に、私たちはいったいどのような死の観念の変容を読み取ることができるのであろうか。

墓地を営まない古代人の場合から考えてみよう。当時の史料には、人間について靈魂と肉体という二つの構成要素から成り立っているという認識が、広く散見される。人間を靈と肉とによって構成される存在とみる思想は、古今東西を問わず広く見られるものだったが、日本の古代においても、魂は肉体に内在しており、それが離脱して帰ることが不可能になった状態が、その人物の死を意味するものと考えられていた。生と死の瞬間を厳密に区別しようとする現代人とは異なり、古代人は両者の中間にどちらにも属さない、ある幅をもった中間領域を認めていたのである。

ひとたび死が確認されたとき次に直面する最重要の課題は、まだ荒々しい性格を帯びていた靈魂の浄化と沈静化を、いかに実現するかという問題だった。残された肉体や骨は魂の抜け殻であり、魂の依り代^よとはみなされなかった。それはもはや、ただのモノであり抜け殻にすぎなかった。死後も浄化の完了しない靈魂が肉体に付着している場合があったが、それはたまたまそうなっているだけであり、魂の多様な存在形態の一つにすぎなかった。古代において、葬地に運ばれた遺体が放置されたままふたたび顧みられることがなかった背景には、遺体⁽²⁾をモノとみるこうした観念⁽²⁾があったと推測される。また古代仏教が遺体の処理にまったくタッチすることなく、もっぱら靈魂の浄化を任務としていたのも、遺骸を軽視するこの時代の社会通念に規定されていたことだった。

さまざまな儀式を通じて浄化された靈魂は、山中や洞窟・地先の島などにある死者の国に向かった。しかし、死後の靈肉分離の理念が明確だった古代においては、靈魂はカミと同じく遊行する存在であり、厳密に一カ所に留まるものとは考えられていなかったようである。魂は中空を自由に飛翔^{ひしやう}できる存在だった。死者は一つの空間を、生者と分かち合っていたのである。

死者の靈のなかでも特に威力があると考えられたものは、カミとして扱われた。七世紀末には、律令^{りつりょう}国家の政策によって歴代の天皇の靈が国家守護のカミにまで祭り上げられ、特定の古墳がその依り代に比定された。カミへと昇華する靈魂の発生とその社会的な認知は、その対極に、不特定多数の人々に災いをなす邪悪な靈魂観念⁽²⁾ 怨靈の発生を促した。ただしカミと怨靈の区

別は固定化したものではなく、一定の作法を踏むことによつて、怨霊は比較的容易にカミへと転換することができると考えられていた。

魂が離脱した遺骸をモノとして取り扱っていた従来の葬法に対し、一二世紀になると霊場や共同墓地が成立し、そこへの納骨信仰が開始される。

古代的な社会構造から中世的なそれへの転換が完了する一二世紀は、思想や世界観の面でも大きな変動期にあつていた。仏教の本格的受容と浄土信仰の浸透に促されて、平安時代の後半から此土しど^{注①}と隔絶した遠い彼岸世界の観念が膨張し、院政期に至つて、この世と断絶した死後に往生すべき他界浄土の観念として定着をみるに至る。古代的な一元的世界観に対する、他界―此土の二重構造をもつ中世的な世界観の形成である。多くの人々は死後、極楽に代表される理想の浄土に往生することを、人生の究極の目標と考えるようになるのである。

³⁾ こうした世界観の転換に伴い、奥の院に祀られた聖徳太子・弘法大師などの聖人は、彼岸の仏すいじやく^{注②}の垂迹として人を浄土へと導く存在であると規定された。彼らのいる空間(霊場)はこの世の浄土であるとともに遥かなる彼岸の浄土への入り口であり、そこへ足を運び祈りを捧げることによつて、他界浄土への往生が可能になると説かれた。霊場に骨を納めることによつて死者の救済が約束されるという観念も、こういった見方の延長線上に成立するものにほかならない。弘法大師が入定していると信じられた高野山の奥の院に納骨が行われた理由も、ここにあつた。

^{注③} 五輪塔や板碑や経塚なども一種の垂迹とみなされ、それらを中心とするミニ霊場が各地に誕生した。そこでも、しばしば結縁けちえんのための納骨が行われた。また惣そう供養塔きようたうとしての五輪塔などの石塔が作り出す、聖なる空間の周辺に共同墓地が発達した。京都周辺の化野あだしのや蓮台野れんたいのといった葬地も、一二世紀ごろには単なる死体の捨て場ではなく、供養塔の林立する彼岸への回路くわいろ聖地と認識されていた可能性は高い。

骨を後生大事に携えて霊場や共同墓地まで運ぶという行動の背景には、少なくともそこに到達するまでは骨に靈魂が留まつて

いる、という観念が共有されている必要がある。ここから私たちは、死後も一定の期間霊魂はそのまま肉体の一部に留まり続けるという、新たな観念の定着を読み取ることができる。生死いずれの状態であっても、魂が容易に遺骸から離れた古代とは異なり、中世では骨と魂との結びつきは、より持続的で強固なものになっている。

ただし、ひとたび霊魂が遠い世界への往生を遂げた暁には、骨は霊魂の依り代ではなく、ただの残骸に過ぎなかった。いつまでも骨に留まる霊魂は、好ましいものとは考えられていなかった。霊場に納められた遺骨が継続的な供養の対象とならなかった背景には、こうした認識があったと推定される。墓地での追善供養や年忌法要が行われることもあったが、その目的は死者の安らかな眠りではなく、依然として土地に留まっている可能性のある霊魂を、確実に浄土に送り出すことだった。

中世後期から近世初頭にかけて、この列島の思想世界は再度巨大な変動を体験する。中世前期において圧倒的なリアリティを有していた他界浄土の観念が、縮小していくのである。

往生の対象としての遠い浄土のイメージが色あせ、現世こそが唯一の実態であるという見方が広まっていく。その結果、死者の安穩は遠い浄土への旅立ちではなく、この世界の内部にある墓地に眠り、子孫の定期的な来訪と読経の声を聞くことになると信じられるようになった。それは逆の言い方をすれば、自分もまた、死後は墓の中から懐かしい人々の生活ぶりを見続けることができるという意識の目覚めにほかならなかった。「草葉の陰で眠る」という近代人が共有する感覚は、こうした世界観の転換を経て、江戸時代以降に徐々に形成された観念だったのである。

死者はその遺骨とともに、永遠に墓地に留まり続けるのである。石塔は浄化の済んだ魂のシンボルだった。それは縁者に霊魂の所在を示す墓碑であり、霊魂の依り代そのものとみなされた。中世とは逆に、死者は常に墓地に留まるべき存在であり、勝手に墓を離れることは不都合で不吉なことと信じられるようになった。とりわけ死後まもない霊魂が遺骸を離脱してさまようことは、厳しい禁忌の対象となった。それを避けるために、いまに残るさまざまに仕掛けが考案され、おとなしく墓に留まる代償として、死者は供養の継続と縁者の来訪を約束された。

⁽⁴⁾ 江戸時代に一般化する、生者と死者がこの世を共有するという感覚は、中世を飛び越して古代に回帰したかのような印象を与

える。しかし、死者と生者の空間が明確に分節化されることなく、人間界と死者・カミの棲すむ他界がほとんど重なり合っていた。古代に対し、近世では両者が明確に分離されるに至る。

(佐藤弘夫『死者のゆくえ』による)

〔注〕① 此土ここの世。現世。

② 垂迹すいせき＝仏・菩薩が、人々を救うために人間の世界に仮の姿をとって現れたもの。

③ 結縁けつえん＝仏道に入る縁を結ぶこと。

問一 傍線部分(1)「そうした風習を必然なものとする固有の死生観」とは、どのようなものか、述べよ。

問二 傍線部分(2)「遺体をモノとみるこうした観念」とは、どのような観念か、述べよ。

問三 傍線部分(3)「こうした世界観の転換」とあるが、どのような世界観から、どのような世界観への転換か、述べよ。

問四 傍線部分(4)「江戸時代に一般化する、生者と死者がこの世を共有するという感覚は、……分離されるに至る」とあるが、筆者は、近世の死生観が古代の死生観、中世の死生観と、それぞれどのような共通点と相違点を持っていると考えているか、述べよ。

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

父が交通事故で急死して慌^{あわ}ただしい何日間かが過ぎると、母はしばらくの間、一見それまでと同じように家事をこなし、やがて突然、眠りに入った。母は眠り続けた。どのくらい眠っていたのだろうか。一週間、いやもつと長かったような気もするけれど、もしかしたら三、四日のことだったのかも知れない。憶^{おぼ}えているのは、いつの間にか夏休みが始まっていたということ、母が眠っている間、小学一年生だった私はおなががすくと缶詰^{かんづめ}のシヤケを食べていたということだ。どうしてうちの戸棚^{とだな}には、シヤケ缶ばかりあったのだろう。缶詰のラベルに描いてあるシヤケの目は冷^{ひや}やかで、とても話が通じる相手とは思えなかった。私はあの時期以来、シヤケ缶が食べられなくなって、今も食料品店に山積みになったそれを見ると、足の裏が冷^{ひや}たくなってしまう。

(1) 私が一生ぶんのシヤケ缶を食べ終えた頃^{ころ}、母は眠りはじめた時と同じくらい唐突に、むっくりと起き上がった。そして今度は私を連れて、電車に乗るようになった。どこに行くというのではない。ただ行き当たりばつたりに電車に乗り、とにかくどこまでもどこまでも乗り、行き当たりばつたりの駅で降りる。そして夏の炎天下、一度も来たことのない町をふたりでぐるぐる歩き回るので。適当な店でかき氷だのそうめんだのを食べ、また電車に乗る。

私たちはその間、あまり話をしなかったように思う。父の話はしたくない、母が心底そう思っていることは、よくわかった。私はいえ、父が死んだときかされた時、とても悲しかった。お棺のなかの、頭に包帯を巻いた父と会った時には、声をあげて泣いた。けれどもその頃になると、なんだか心に膜が張ってしまったようになって、元氣だった父をあれこれと思ひ出すこともなくなっていた。母が悲しみのあまり抱いていた周囲の世界への怒りと拒絶、それが私にも伝染していたのだ。

夜、ふたりとも疲れ切つて家に帰ると、敷きっぱなしの布団に倒れ込むようにして眠る。楽しかったという記憶はないけれど、そんな毎日を繰り返してさえいれば、母は何とかもつ。六歳の私は、ただそれだけを思っていた。それに、シヤケ缶ばかり食べているよりは、百倍ましだった。

とはいえ、ポプラ荘を見つけたことができたのは、そんな電車ツアーのおかげだったのだ。

私たちはがらすきの郊外電車に、長いこと乗っていた。その駅で降りたのは偶然だったのだが、降りてみるとホームから河川敷が見下ろせた。コンクリートの照り返しの眩しさに顔をしかめながら、私たちはホームの先端まで歩いていった。川も草も橋も埃っぽい地面も、容赦ない日射しに晒されている。川の水は少なく、流れはいかにも弱々しかったけれど、空は途方もなく大きい。私は何か「どうだ」と言いたいような気持ちになって、息を大きく吸い込んだ。

「改札出てみようか」

この電車ツアーが始まって以来、母が私に「これに乗ろうか」とか「ここで降りようか」とか、何か相談するなどということは一度もなかったもので、私はとても驚いた。

「いや？」

私は慌てて首を振った。

「いやじゃない」

②
そうしてひどく生真面目な、しっかりしなくてはいけないというような気持ちになって、すたすた歩く母の横を、真ん前ばかり見つめて歩きはじめた。

駅前の商店街を抜けると、消防署があった。消防署の手前にはどぶ川が流れていて、私たちはその川に沿って、かわりばえのない住宅地をどこまでも歩いていった。午後二時頃だったと思う。川沿いの歩道に日陰はなく、太陽は音さえ遮るほどの強さで照りつけ、セミも鳴かず、人影も見えず、鳥も飛ばず、私の水筒はとくに空っぽになっていた。いつの間にか遅れをとってしまった私は、母の背中だけを見て、ひたすら両足を交互に動かしていた。

「あそこまで行ってみよう」

母がふいに立ち止まってそう言った時、頭のなかはすっかり止まってしまっていたのと反対に、両足は急には止まれなくなっていたから、私は汗で前髪のはりついたおでこを母の柔らかな腰にぶつけてようやく、その指さす先をぼうつと見上げた。

「ほら、あの木。大きいね」

「ほんとだ」

住宅地の屋根の間から、電柱よりも高い木が、にゅつと突き出ている。風は少しも感じられなかったけれど、高いところの葉っぱはゆさゆさと揺れていて、見ただけで汗がひいた。

「あの木を見に行こうよ」

「うん」と私は頷いた。

「千秋、汗だくだね。水筒は」

「もう飲んじゃった。でも平気だよ」

私は再び、がんばらなくてはという気持ちになって、母の先に立って歩きだした。そのまま川沿いをしばらく行き、やがて川を背にして車一台がようやく通れるほどの道に入ると、大きな木のある庭はすぐに見つかった。

庭は、草取りは行き届いているものの整然とした、という印象からはほど遠く、かと言ってあれもこれもと涙ぐましく植え込んでいる手合いでもなければ殊更ことさらに興味的でもなく、もちろん殺風景でもなかった。要するに、長い時間とちよつとした律儀さりちぎの積み重ねでそうなたただけで、庭の主しゅにそれ以上凝る気はまったくないらしい、ということがよくわかるのだった。青い葉を繁しげらせているモミジ、隣の家の物置の屋根にまで腕を伸ばして赤い花を咲かせているキョウチクトウ、アオキはつやつやして、コデマリは見事にざんばらだ。オレンジ色のユリが、なんの脈絡もなくあちこちに顔を覗かせ、青い火鉢ひばちがいかに満足気に、てん、と土の上に座っていた。そして庭の真ん中に、時折かすかな上空の風に葉を揺らしながら、その大きな木が立っている。じつと見上げているうちに、私はその場に座り込んで眠ってしまいたくなくなった。

「千秋、千秋」

母が私を手招きした。「あの木の名前、わかった」

「なんていうの？」

「ポプラ」

母は、ほら、と指さした。ブロックを積み重ねた門柱の、白い陶器の表札に「コーポポプラ」とある。ポがだぶるのがおかしくて、私は口のなかで「ポポプラ、ポポプラ」と繰り返した。

「普通の家じゃないのね。二階がアパートになってるんだわ……」

母もまたひとり言のように呟く。

川沿いの道に面した北側に、外階段があった。二階の通路にはドアが三つ、そのうちふたつのドアの横には、洗濯機せんたくきが置いてある。木造の、あまり立派とはいえないアパートだ。

「千秋、ここに住むのどうかな」

その日二度目の質問があまり唐突だったので、私はまたしても答えに窮してしまった。母の視線をたどると、開けっ放しの鉄製の門扉もんびに、ボール紙の札がぶら下がっていた。

「空き部屋あります、だって」

「あきべや？」

「ここにお引越しませんかって書いてあるの」

ここに引越す、というのは、なかなかいい考えのように思えた。どのみち、それまで住んでいた家を出なくてはならないらしいということはうすうす知っていたし、何と言っても、私はこの庭が気に入ってしまったのだ。

「おかあさんがそうしたいならいいよ」

「千秋はどう？」

「いいと思う」

(4) 母は私の顔をちよつと覗き込み、それからすたと、なんの躊躇ためらいもなく門のなかに入ってしまった。

(湯本香樹美『ポプラの秋』による)

問一 傍線部分(1)「私が一生ぶんのシヤケ缶を食べ終えた頃」とあるが、そこから「私」のどのような気持ちが読み取れるか、述べよ。

問二 傍線部分(2)「そうしてひどく生真面目な、しつかりしなくてはいけないというような気持ちになって」とあるが、なぜそのような気持ちになったのか、述べよ。

問三 傍線部分(3)「じっと見上げているうちに、私はその場に座り込んで眠ってしまいたくなった」とあるが、なぜそうなったのか、述べよ。

問四 傍線部分(4)「母は私の顔をちよつと覗き込み、それからすたと、なんの躊躇もなく門のなかに入っていった」とあるが、ここでの「母」の気持ちを説明せよ。

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ある公卿、石見国の国司にて、石見潟にて遊び給ひけるに、国の習ひにて、かづきする海女ども、えもいはず歌をうたひけるを、人々、「かかる事なむ侍り。召してうたはせて聞こしめせかし」と申しければ、「召せ」とて、召されけるに、皆逃げけるを、中間、侍ども、走り散りて、少々とらへて参りぬ。御酒なむど給はりて歌仕りける時、逃げ散りたりつる海女ども、また、かたはらに引きのけて、これを群がりゐて聞きける中に、十七、八ばかりなる女の、みめ事がら、下臈ともなく、よろしく見えけるが、小侍を一人招き寄せて、「あの御前に候ふ、歌仕る女房どもがもとへ、かく申すよし、伝へてたび候へ」とて、

〔A〕 もろともにあさりしものを浜千鳥いかで雲井に立ちのぼるらむ
この事を披露しけるを、上に聞き給ひて、感のあまりに、紫の衣を一かさねたびけるを、

〔B〕 紫の雲の上着も何かせむかづきのみする海女の身なれば
と申して、返し参らせければ、いとど色まさりて、あはれに思しめして、やがて召してけり。

「都へ具して上らむ」と仰せられけるを、父母に離れん事を嘆き申しければ、父母ともに具して上りて、御台所となりて、君達あまた出できなむどして、めでたかりけり。人の心は優しかるべきものなり。

〔『沙石集』による〕

- 問一 傍線部分(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は、それぞれ誰の動作か、文中の語句を抜き出して答えよ。
- 問二 Aの歌の「浜千鳥」「雲井」の語は、それぞれ何をたとえたものか、答えよ。
- 問三 波線部分「返し参らせければ」とあるが、なぜそのようなことをしたのか、Bの歌を踏まえて説明せよ。
- 問四 二重傍線部分「人の心は優しかるべきものなり」は、誰の、どのような行為を受けて述べたものか、文章全体を踏まえて説明せよ。

第四問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。)

使^ム居^{マシテ}有^ラ良田^ニ。広宅^ニ。背^{ニシテ}山^ヲ臨^ミ流^{レニ}、溝池^ニ環^{注①}匝^ニ、竹木^ヲ周布^シ、場圃^ヲ築^キレ

前^ニ、果園^ヲ樹^レ後^ニ。⁽¹⁾舟車^ヲ足以代歩^ニ、涉^ル之^ノ難^ニ、使^{注②}令^ハ足^ル以^テ息^{ハスニ}、四体^ノ之^ノ役^ヲ。

養^{フニ}親^ヲ有^リ兼珍^ニ之^ノ膳^ニ、妻孥^ニ無^シ苦^{シムル}身^ノ之^ノ勞^ヲ。⁽²⁾良朋^ヲ萃^{アツマリ}止^ム、則^チ陳^{ツラネテ}酒肴^ヲ以

娛^ヒ之^ヲ。嘉時^ニ吉日^ニ、則^チ烹^{ニテ}羔^ヲ豚^ヲ以^テ奉^ズ之^ヲ。躡^{注③}踏^シ畦苑^ニ、遊^ビ戲^シ平林^ニ、濯^{注④}清

水^ニ、追^ヒ涼風^ヲ、釣^リ游鯉^ヲ、弋^ト高鴻^ヲ。風^{注④}於^テ舞雩^ノ之下^ニ、詠^{ジテ}歸^ル高堂^ノ之上^ニ。

安^{ニシテ}神閨^ヲ房^ニ、思^ヒ老氏^ノ之^ノ玄虚^ヲ、呼^{シテ}吸^シ精和^ヲ、求^ム至^{注⑤}人之^ノ彷彿^ヲ。与^ニ達^ス者

数子^ヲ、論^ジ道^ヲ講^ジ書^ヲ、俯^シ仰^シ二^{注⑥}儀^ヲ、錯^ス綜^ス人物^ヲ。彈^ジ南風^ノ之^ノ雅操^ヲ、発^ス清商

之^ノ妙曲^ヲ。逍遙^シ一世^ノ之上^ニ、睥睨^ス天地^ノ之間^ヲ。不^レ受^ケ当时^ノ之^ノ責^ヲ、永^ク保^ツ性

命之期^ヲ。如^{クンバクノ}是、則^チ可^シ以^テ凌^シ霄漢^ニ。出^ツ宇宙之外^ニ矣。⁽⁴⁾ 豈^ニ羨^{マン}夫^ノ入^ル帝王^ニ之門^ニ哉。

(仲長統「樂志論」による)

〈注〉① 環匝^ニめぐる。

② 使令^ニ召使い。

③ 躡躡^ニぶらぶら歩く。

④ 風於舞雩之下、詠歸高堂之上^ニ『論語』を踏まえた句で、身近な人達と一緒にピクニックを楽しみ、のどかな気分で歌いながら我が家に戻ることをいう。

⑤ 玄虚^ニ奥深い考え。

⑥ 至人^ニ道をきわめた仙人。

⑦ 二儀^ニ天地。ここでは、世界全体。

問一 傍線部分(1)「舟車足以代步涉之難」を現代語訳せよ。

問二 傍線部分(2)「良朋萃止、則陳酒肴以娛之」を書き下し文にせよ。

問三 傍線部分(3)「濯清水、追涼風、釣游鯉、弋高鴻」とあるが、これはどのような境地を求めたものか、説明せよ。

問四 傍線部分(4)「豈羨夫入帝王之門哉」とあるが、どうしてこのように考えたのか、本文の前半・後半の内容を踏まえて説明せよ。